

第 2 9 回
宮崎整形外科懇話会
プ ロ グ ラ ム

日 時 平成 6 年 1 2 月 1 7 日 (土)
1 4 : 5 0 開会

会 場 宮崎医科大学臨床講義室 2 0 5

事務局 宮崎医科大学整形外科学教室内
〒889-16
宮崎郡清武町大字木原 5200
TEL 0985-85-1510 (代) 内線 2220
0985-85-0986 (直通)
FAX 0985-84-2931

—— 参加者へのお知らせ ——

1. 参加費 ; 今回は徴収致しません。
2. 年会費 ; 未納の方は受付で納入お願いします。 5000円
(受付14:20 より)

—— 演者へのお知らせ ——

1. □演時間 ; 1 題 6 分、討論 3 分程度とします。
2. □演用スライド ; 単写とします。演者は講演 30 分前までにスライドをスライド受付に御提出下さい。

—— 世話人会のお知らせ ——

14:10 ~ 14:40 第二会議室 (3階)

—— 特別講演のお知らせ ——

17:00 ~ 18:00

『膝蓋大腿関節不安定症の概念』
福岡整形外科病院院長
小林 晶 先生

註 上記講演は日本整形外科学会教育研修会 (1 単位) に認定されておりますので、御参加下さい。
尚、受講料 1000円を申し受けます。

14:50 開 会

15:00 一般演題Ⅰ. 座長 獅子目 賢一郎

1. 診断に難渋したアレルギー性亜敗血症の1例
宮崎医科大学整形外科 山本恵太郎
2. まれな部位に発生した離断性骨軟骨炎の二例
永吉整形外科 永吉 洋次
3. ネコひっかき病による皮下腫瘍の3治験例
県立宮崎病院整形外科 東 高弘
4. 広汎な骨膜下膿瘍を形成した小児の大腿骨化膿性骨髓炎の一例
県立宮崎病院整形外科 井手 康人
5. Ender 法による大腿骨頸部外側骨折の治療成績の検討
県立日南病院整形外科 矢野 浩明
6. 超高齢者における大腿骨頸部骨折の予後
県立延岡病院整形外科 大江浩一郎

16:00 一般演題Ⅱ. 座長 河野 雅行

7. 強直性脊椎疾患に上位頸椎病変を合併した2例
宮崎医科大学整形外科 福元 洋一
8. 硬膜内髄外脊髄腫瘍15例の治療経験
県立宮崎病院整形外科 後藤 啓輔
9. 自動車乗用中に生じる腰痛に関する小規模アンケート調査
平部整形外科医院 平部 久彬
10. 諸塚村における振動病の実態
諸塚村国民健康保険病院 末永 治
11. パソコンを用いた臨床症例の記録
県立宮崎病院整形外科 松本 光司

17:00 特別講演 座長 田島 直也

『膝蓋大腿関節不安定症の概念』

福岡整形外科病院院長 小林 晶 先生

18:00 閉 会

開 会 (14:50)

一般演題 I. (15:00~16:00) 座長 獅子目 賢一郎

1. 診断に難渋したアレルギー性亜敗血症の1例

宮崎医科大学整形外科

○山本 恵太郎 桑原 茂
帖佐 悦男 谷口 博信
柏木 輝行 永井 孝文
田島 直也
岡田 光司

岡田整形外科医院

症例は39歳の男性。胃癌切除の既往あり。誘因のない腰痛・多関節痛・不明熱で紹介入院した。症状より癌の転移、感染症や成人Still病などの膠原病を疑ったが、血液検査・シンチ・CT・MRI等の検査にて否定的となった。そこで、左膝関節痛に対し関節鏡を施行。顕著な滑膜炎を呈しており、滑膜組織には、異型細胞は認めず、非特異的な、好中球の浸潤を伴う慢性炎症細胞浸潤を認めた。好中球増多・血沈亢進・CRP強陽性・肝機能障害などの臨床症状よりアレルギー性亜肺血症と診断した。症状はプレドニゾン内服により軽快した。

2. まれな部位に発生した離断性骨軟骨炎の二例

永吉整形外科

○永吉 洋次 岩切 清文

膝関節離断性骨軟骨炎は大腿骨内側顆の顆間窩側にみられることが多い今回、我々は比較的まれな部位に発生した症例、外側半月板部分切除術後に脛骨外顆関節面に発生した離断性骨軟骨炎の一例と大腿骨外顆部膝関節面に発生した離断性骨軟骨炎の一例を経験したので報告する。

3. ネコひっかき病による皮下腫瘍の3治験例

県立宮崎病院整形外科

○東 高弘 高妻 雅和

同 病理

小林 邦雄
林 透

ネコひっかき病は、ネコに噛まれたり、ひっかかれた傷から、引き起こされる疾患であるが、近年この比較的稀な疾患が、ペットブームに沸くわが国でも増加傾向にあり、注目されつつある。しかし、その症状は、リンパ節の腫脹や発熱といった他に特異的な徴候がないため、外来診療においては見逃されるケースが多い。また、小児に多いこの疾患は、皮下腫瘍を形成した場合、MRIにおいても良性・悪性の鑑別が困難となる。今回、我々は、皮下腫瘍にて精査した結果、ネコひっかき病と診断された3例についてMRI所見を中心に若干の文献的考察を加えて報告する。

4. 広汎な骨膜下膿瘍を形成した小児の大腿骨化膿性骨髓炎の一例

県立宮崎病院整形外科

○井手 康人 松本 光司

小林 邦雄 徳久 俊雄

高妻 雅和 佐本 信彦

今回我々は広汎な骨膜下膿瘍を形成した小児の大腿骨化膿性骨髓炎の一例を経験したので報告する。症例は12歳男性、39°C台の発熱、右大腿部腫脹、熱感を認めた。血液検査でWBC増多、核の左方移動を認め、CRP強陽性であった。MRIでT2強調画像にて骨膜下に広く高信号域を認めた。穿刺にて血性の膿が吸引され、精査加療目的で入院となった。穿刺液および血液培養で黄色ブドウ球菌が認められた。この症例に対して切開排膿、骨開窓、さらに骨髓内へ抗生物質を持続注入する方法を試みた。MRIは回復期の病巣の経過観察にも有用であった。

5. Ender 法による大腿骨頸部外側骨折の治療成績の検討

県立日南病院整形外科

○矢野 浩明 長鶴 義隆
黒田 宏

【はじめに】高齢者に多い大腿骨頸部外側骨折に対するEnder法は手術侵襲が少なく早期荷重が可能であることより優れた治療法とされている。今回我々は術後1年以上経過した症例について調査・検討し若干の考察を加え報告する。

【対象及び方法】1992年4月～1993年12月までに加療を行った、男性5例女性18例の計23例、平均年齢80歳(58～95歳)を対象とし、術前後の歩行能力の比較により術後成績を判定し①骨折型(エンダーの分類)、②合併症、③ピン刺入位置、④ピン刺入深度、⑤ピンの分散度、⑥X線学的合併症との関連について検討した。

【結果】優9例、良10例、可1例、不可3例、(死亡3例)であった。予後不良例は、合併症(両側骨折例・重度全身合併症)を有する症例であった。また不安定型の5例中3例にピンの末梢転位による再挿入術を必要とした。その3例中2例にピンの分散不良が認められた。

以上の結果について検討し若干の考察を加え報告する。

6. 超高齢者における大腿骨頸部骨折の予後

県立延岡病院整形外科

○大江浩一郎 永田 高見
谷脇 功一 木屋 博昭
弓削 孝雄 塩川 徳
川添 浩史
藤本 徹

熊本労災病院

【目的】超高齢者における大腿骨頸部骨折が、その後の生命予後、機能的予後に与える影響を調査検討した。

【対象・方法】1988年から1993年までの5年間に当科に入院した90歳以上の大腿骨頸部骨折患者30人31股関節(男性2名、女性28名、平均年齢93.4歳)を電話及び直接面談にて追跡調査を行った。

【結果】調査時死亡者15名。期待生存率曲線を作成し、受傷後1年間の生存率を比較すると3ヶ月以内の生存率は減少傾向にあった。3ヶ月以内の死亡例は腎不全、肺炎の2例であった。受傷前31例中28例(90.3%)が歩行可能で、術後は生存例16例中8例(50%)が歩行可能であった。自立度では16例中10例(62.5%)が自力にて移動可能であった。

一般演題Ⅱ. (16:00~16:50) 座長 河野 雅行

7. 強直性脊椎疾患に上位頸椎病変を合併した2例

宮崎医科大学整形外科

○福元 洋一 田島 直也
平川 俊一 久保紳一郎
田辺 龍樹 黒木 浩史

今回我々は強直性脊椎疾患に上位頸椎病変を合併した2例に対して後頭骨頸椎間固定を行ったので報告する。

【症例1】69歳、男性。四肢不全麻痺にて発症。レ線上、頸椎・胸椎前縦靭帯にASHによる広範な骨化とともに、環椎の低形成と環軸関節の関節症性変化を認めた。またMRIにて環椎高位にて前後方向から脊髄は著明に圧迫されていた。環椎椎弓切除後 C-Dinstrumentを使用した後頭骨頸椎間固定を行った。

【症例2】62歳、男性。転倒後、頸部痛が持続し当科受診。レ線上、軸椎歯突起の変形治癒骨折を認めた。環椎椎弓切除・後頭骨部分切除による除圧とともにC-Dinstrumentを使用した後頭骨頸椎間固定を行った。

【考察】一般的に脊椎強直性疾患においては脊髄症状を呈することは少なく、さらに上位頸椎はその解剖学的特殊性から強直に至ることはほとんどない。よって脊椎強直性疾患においては上位頸椎が頸椎における唯一の可動性となる事が多く、外力を含めた動的負荷の集中する部位であるといえる。症例1ではASHによる下位頸椎可動性の消失により環軸関節への動的負荷が増大した結果、同関節の関節症性変化をきたし歯突起後方滑膜組織の増殖をきたし、脊髄圧迫を助長したものと推察された。また症例2は外力が環軸椎部に集中した結果、歯突起骨折をきたしたものと推察された。

8. 硬膜内髄外脊髄腫瘍15例の治療経験

県立宮崎病院整形外科

○後藤 啓輔 徳久 俊雄
佐本 信彦 小林 邦雄
高妻 雅和 松本 光司

【目的】昭和61年 7月～平成 6年11月まで10年間に手術を行い、かつ病理学的に診断し得た硬膜内髄外腫瘍15例を経験したので、若干の文献的考察を加え発表する。

【対象および方法】対象は、男性 6名、女性 9名、年齢は、21歳～75歳（平均51.6歳）、部位は、頸椎 3例、胸椎 3例、腰仙椎 9例であった。術前評価は、単純レ線、ミエロ、ミエロCT、MRI（10名）を行った。手術法は、椎弓切除もしくは、片側椎弓切除術で行った。術後病理診断は、糸線鞘腫11例、髄膜腫 2例、上衣腫 1例、類皮嚢腫 1例であった。

【結果】術前症状の、疼痛、しびれは、全ての症例において軽減した。筋力低下、膀胱直腸障害は、一部の症例で不変であった。また、症例を吟味すれば片側椎弓切除術で満足すべき結果が得られた。

9. 自動車乗用中に生じる腰痛に関する小規模アンケート調査

平部整形外科医院

○平部 久彬

質問の不備などがありましたが、車に乗用することを職業としないA群約90名と職業とするB群約50名について腰痛の生じる割合などにつき小検討を行いましたので報告します。

10. 諸塚村における振動病の実態

諸塚村国民健康保険病院
宮崎医科大学整形外科

○末永 治
桑原 茂 田島 直也

諸塚村国民健康保険病院で加療した振動病患者38人について検討した。対象38例中33例、87%が昭和51年から昭和56年にかけて認定されたものである。臨床症状は多彩で、レイノー現象、手指のしびれ感・疼痛・冷感など末梢神経・循環・運動系の症状や、項部痛、腰痛、肘関節痛など骨・関節系の症状、また、頭重感、睡眠障害、耳なりなど中枢神経系の症状がいろいろの割合に混合して病像を形成していた。症状固定となり治療を中止するものがあり、現在加療中の患者は8人である。昭和60年以降振動病に認定されてきた患者は2名であり、振動病に対する認識の高まりや振動工具・労働条件の改善で振動病患者、特に重傷のものは減少している傾向がうかがえる。振動病は過去の病気になりつつありと考えるが、今なお振動病に悩む人がいることも事実である。

11. パソコンを用いた臨床症例の記録

県立宮崎病院整形外科

○松本 光司

研修中の医師が、いわゆる臨床力を伸ばしていくためには、自分の経験症例を蓄積していくことが重要であることはいうまでもありません。自分の臨床症例のノートをつくっておられる方も多いと思います。しかし人間の記憶力には限りがあり、貴重な症例も年月を経るうちにすっかり忘却のかなたということもあるでしょう。それに対し、デジタル化した情報は検索が一瞬で可能であり、情報量が劣化することはありません。

最近のPersonal Computerの進歩は著しく、以前は処理が困難であった写真などの画像データを比較的手軽に扱えるようになってきました。

まだ試行錯誤中ではありますが、Macintosh上で動くソフトであるHyperCardを用いて、画像を含めて症例を記録していくシステムを構築したので紹介します。例えば、数年前の手術の術中写真を一瞬で呼び出すことも可能です。

— 休 憩 —

特別講演 (17:00~18:00) 座長 田 島 直 也

『膝蓋大腿関節不安定症の概念』

福岡整形外科病院院長
小 林 晶 先生

閉 会